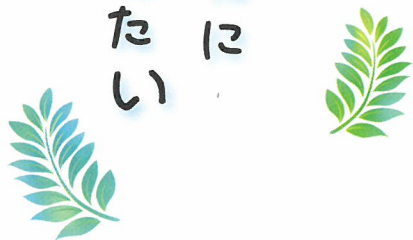


いま、
あなたに
伝えたい



法政大学総長

田中優子さん

たなか ゆうこ／神奈川県生まれ。江戸時代の文学・生活文化研究者。2003年法政大学社会学部教授、2014年より法政大学総長。著書に『江戸の想像力』（ちくま学芸文庫）、『江戸とアバター』（朝日新書）、『自由という広場』（法政大学出版局）ほか多数。



●「そろそろ」社会運動の話をご紹介します

自分がいろんな目にあって「これはおかしい」と思った時に、なにも言わないでいると、なにも変わりません。運動の原点とはただそれだけなんです。

2014年に法政大学社会学部でつくった『そろそろ「社会運動」の話をしよう』は、複数の教員が一緒の教室に入り、それぞれ自分がやってきたことを話すという講義を基につくった本です。

そのときに、教員たちは別に大きな社会運動をしているわけではなく、たとえば自分の子どもが通っている保育園が民営化されることで大変な悪条件になる、これをなんとかしたいと思って保育園についての運動に入ったとか、そういう身近な話をしています。

まさに生活のなかで突然なにかが起り、その時に黙っているのではなくて、一人ひとりの教員が、ほかの人にも呼び掛けて「これはおかしい」ということをみんなでちゃんと一言わなくてはいけないと行動していくと、そこに自然と運動が起こって、ものごとが変わっていく。こういうことを経験しています。それは、ある動きを留めたり、逆にある動きを加

最終回

社会運動は身近なところにある

速させたりするのにとても大事なことなのです。

このように、急にとんでもないことを起こすのではなく、日常のなかでなにかを是正していくということは、運動を通さないとできないこともあります。

●運動はシンプルで身近

私はこの本のなかで江戸時代の一揆について書きました。江戸時代の一揆はともシンプルで、目標がはっきりしていて「このことを撤回してくれ」とか「このことをやめてくれ」と言っているだけなんです。でも、それが積み重なっていきことが大事です。

だから、たとえば今、香港で起こっていることも、「選挙したい」と言っているだけなんです。それは私たちにとっては

あたりまえのことですが、そのあたりまえのことができない。だから「したい」と言っている。とても明確ですよ。運動とはああいうものなんだと思います。

しかし、運動を自分たちで起こせないがために非常にひどい状態から脱却しきれない人たちも多くなります。それが難民です。難民は運動を起こすことができません、国連に頼るしかないという状態がずっと続いてしまいます。そのように運動を起こすことができない人に対しては、だれか起こせる人が運動しなければいけないという構図はあるように思います。

*

運動にはさまざまな方法があります。寄付をするのも運動だし、いろんなボランティア団体に所属するのも運動だし、そのために一年に一回なにかするの

運動です。ですから、気軽にできる運動は世の中には実はたくさんあります。

また、運動を続けていくためには、世界中で今なにか起こっているのかを知っておくことが必要です。世の中で起こっているすべてのことを調べるといことは毎日の生活のなかでは大変ですが、いくつか自分はこれについて知っておこうとか、関心が湧いたものについてはいつも知っておくと思います。

そして、それに対して自分はどういう立場をとるのか、たとえば、私はこの対立のなかのどちらの立場に立つのか、その理由はなにか、ということをやちゃんと決めておくことが大切なのです。

